

Weekly Michael's News

<今週の聖句>

2017年7月17日発行 No.44

『ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。耳のある者は聞きなさい。』
(マタイによる福音書 13:8~9)

<時代を超えて語り継がれる言葉の力!! 神戸バイブルハウス主催の聖書リレー朗読会に参加!!>

先週、私は小さな集会に参加してきました。聖書を世界に広める活動を続けている「神戸バイブルハウス」の主催する「聖書リレー朗読会」です!! これは、旧約39巻+新約27巻=計66巻ある分厚い聖書を毎日朝9時から夜8時まで、計100時間以上をかけて、延べ人数500人以上の協力を得ながら読み繋いでいくという壮大なプログラムです。私は15分間×2セット、計30分間を担当しました。マイクを向けられ、大きな声で間違えずに聖書を読み上げるのは結構大変で、かなり緊張しましたが、心を込めて、意識を集中して読み直してみると、色々なメッセージが聖書から湧き上がって来て、聖書との距離がぐっと縮まったように感じられました。

私は、今回の短い体験で、この聖書の持つ魅力を改めて感じたように思います。情報機器の発達により便利な道具や最新の情報が身の周りに溢れていますが、本当に心と心を繋ぐのは、魂の籠った言葉の力です。聖書には、時代や国・文化の変遷に流されない普遍的な言葉の力が宿っているように思います。毎日行われるお昼の礼拝でも、様々な聖書箇所が読み上げられていますが、それらを土台としつつ、私たちが繋ぐコミュニケーションの基本である「言葉」を大切にしていきたいと思います。



センター内には古い聖書や、様々な国の聖書など資料的価値の高い展示が…

言葉が心に染み入る瞬間!!

<チャペルホールの格調がグッとUP!! 経済学部小林先生が入魂の作品を寄贈して下さいました!!>

先週からキリスト教センター入口のホールの雰囲気に変化しているの気が付きましたか? 大きい割にあまり効果的に使われていなかった掲示板が外され、代わりにシックな額に入った2枚の絵が掲示されました。これは経済学部の小林敬一郎先生(センター通信の「世界の教会コーナー」でもお馴染みですね!!)による作品で、KIU全景とチャペル正面の様子が緻密に描かれています。建築に関して造詣の深い小林先生は、このKIUやチャペルに込められている意味やメッセージを感じて作品に生かしておられます。ぜひ一度じっくり見つめてみて下さい!! 場所はセンター入口の右側です!! 小林先生ありがとうございます!!



<先週のメッセージ>

※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています

7月10日(月) テーマ:「なんでバイトするの?」

石原 正彦(刊社教習-主務)

現在アルバイトをしている学生は多いと思うが、今回のテーマのように「なぜバイトをするか?」を考えた事があるだろうか? 恐らく「生活費や授業料などお金のため」だとは思いますが、それだけを目的にして欲しくない。思えば私も学生時代に色々な種類のアルバイトを通して、そこでしか得られない経験や出会いが与えられた。それによって自分自身の器を広げてもらい、また社会に出る上での不安をずいぶん和らげて貰ったようにも思う。今日の聖句は有名なクリスマス物語の一部だが、「星」がキーワードになっている事が分かる。自分を導く「星」の存在を意識しながら歩みたい。

7月11日(火) テーマ:「営業という仕事」

木村 憲幸(大学職員)

私は大学卒業後に電機メーカーに就職、営業部に配属された。以降15年間一貫して営業の仕事に従事してきた。営業は、自社商品の購入を通して会社全体の収益を担う重要な部門である。入社2年目を迎えた私は、家電量販店での勤務をしながら、そこで一人の高齢の女性の接客を担当した。閉店時刻間際にはあったが、予算以外にも部屋のサイズや購入意図等を雑談に交えながら丁寧に対応すると、家電製品一式(いわゆるブライダル案件)の購入を承る事になった。人から信頼される事の大切さと喜びを感じ、私にとって忘れられない出来事となった。「働く」という事は、重い責任も生じ、その内容も当然厳しい。しかしそれを通して得られる発見や成長もまた大きいと思う。

7月12日(水) テーマ:「清貧への願いについて」 ~聖フランチェスコの生涯から考える~

三宅 義和(経済学部)

「平和の祈り」を残した聖フランチェスコは、イタリアンのアッシジ生まれ。父はフランスにまで手を広げる偉大な商人であった。幼少時より裕福な家庭で育ったフランチェスコだったが、時代のうねりの中、投獄され、病を負う。そんな苦しみ、また世界に蔓延る不公平を前に、自分の中に変化を感じたフランチェスコは、父の反対を押し切って修道生活に入り、生涯清貧を貫く。世の願いはいつの時代も金や権力を求めるが、フランチェスコの生涯が示す清貧はその真逆だ。彼を清貧に駆り立てたものは何か?それは純粋な「願い」であり、清貧そのものが彼の中で大きな喜びに結びついていた。空の鳥のような無欲こそが、実は幸せへの大きなヒント…なのかもしれない。

7月13日(木) テーマ:「あきらめないこと」

滝本 幸世(経済学部)

幼少期より苦手なものが多かった私は、知らぬ間にあきらめる人生を歩んできたように思う。しかし、大学院に入る時は違った。急に原因不明の体調不良に陥り、点滴と通学を繰り返しながら、それでも何とかと踏ん張りながら通院を続けた。大変苦しかったが、検査の結果、原因は「ストレス」、我慢し過ぎだった。あの時の自分を振り返って思うのが、「あきらめない事の大切さ」だ。たとえ目標に到達しなくても、あきらめずに取り組んだという経験は、その後の歩みに良い影響を与え、次の未来を切り開く力になる。厳しさが叫ばれる時代であるが、経験が必ず力になる事を信じて歩みたい。

7月14日(金) テーマ:「言葉って、マジ『神』!!」

野間 光顕(チャプレン)

先日、神戸バイブルハウスの主催する「聖書リレー朗読会」に参加した。分厚い聖書、総計66巻を約100時間、500人以上の協力を得ながら読み繋ぐ壮大なプログラムだ。幼少から何度も耳にしてきた個所でも改めて読み直す事で、色々なメッセージを再発見できたし、またその場に集う皆が、その聖書を中心に一つになっているような連帯感も覚える事ができた。ここに改めて聖書の持つ魅力が示されている。現在社会はとても便利ではあるが、そのような技術や物資が無かった頃から、聖書は人々の間で読まれ続け、喜びと希望を分かち合ってきた。言葉の力が損なわれているという批判も耳にする現代社会ではあるが、私たちが繋ぐ「言葉」の存在を大切にしたい。(文責:野間 光顕)